へ13
3334
2

門 ヘ13
3334
2

河内國丹北郡松原新宮邨

村田八郎兵衛

一冊

藏川

役行者御傳記圖會卷之中

浪華　藤東海著

役行者金剛山御登山女人禁制足摺岩之話

並茅原寺建立御遺像之話

頃ハ人皇三十九代天智天皇四年。行者御年三十二歳より。呪力をつくし種種の危難をもくゝ。上六萬余の君より。下賤の土民に至まで。尊敬をゝ。神の如く。然ども。行者是を敢て喜び玉ハゞ。眼前の衆生を救ふのみならず。未世強剛の衆生を化度せんと。在家の修行ハ備足せず。深山幽谷に入て行ひ。世望清淨の地を求ゝ。遂に葛城の嶽より。龍に乘て飛去るとの。其容貌中華人に似ず。油きぬの笠をかむり。虚空を翔り。瞻駄山に行。午の刻に至。住吉の松の峯に止り。それより西方に飛去り。行方を不知

大正十八年九月
本大學出版部

見るもの。奇異の思をなす。帝へ奏し奉ると雖も。何者とも不分と不思議なり葛城山。名金剛山又の名を。神祇宝山。采山峯。高天山。などの名有。大和國葛城上の郡。同下の郡。忍海郡。此三郡に連り。嶺の西八河列に隷。山の高きこと。三百餘丈なり。葛城と云八。山に防已葛多く。縛るまとりよりて。後世に至りて。ふどーかづらを葛城の名産とす。此故に葛城山の名のりまうし。曰く神武天皇の御宇。大ひなる土蜘蛛もんぐ。人をとり食す。天皇勅を下し。藤かつらをとりて。網を作り麓より圍こて。蜘蛛を殺す。是より葛城郡。山を葛城山と号す。城と云八圍むこてろうる故に。行者此山に登るをかもひ立く。母公に向ひ。未世の衆生を。化度せん為。葛城山に入るを願ふ。母をこひ玉八。母公御心に叶ぬ。今既に三十二年の功をほこて。難苦の今を叔こる。幾千人の數を志らす。上一人より。下万人の敬ひをうけ。身に足ぎることなり。誓言末世の為なれバとて。一人の親をすて。山に入ぐ八。神佛の御心も叶まじ

唯一人の男子を。何とて山に捨べきとさらに免し玉ぬ。行者曰く。仰さもいるべきなれども。仏祖釋尊も。出家の御發心いろ〳〵とき。父淨飯王免し玉ぬ。別殿を建。堅く四門を守らせ。御側に十二童子を置。晝夜を守護し。三人の美女を撰ム。出家の御心をなぐさ。如是御心を学ブし玉ぬ。夜中に宮殿を忍び出。檀得山に登り。夫より雪山に至ル。仙人を師と頼ム難苦十二年の功を積。又或時八雪山の谷間に下り。九足八面の鬼に逢て。諸行無常是生滅法。生滅々已。寂滅為樂。之偈を聞。正覺成道し玉ぬ。依之摩耶夫人。天に生を受て。帝釈天の后に立玉ぬ。釈尊八四月中より。天に上り七月中に至まで二夏の間。父母報恩經を說玉ぬ。後世夏中。天へ花を奉らるハ此故なり。父母の御心に背き。不孝に似たれども。正覺成道して。不孝却孝となる。彼身を佛祖釈尊に比し難けれど。深山に入り。衆生濟度の為。修行の功を積ハ母公

への孝ともなるべしと願い王ども母公是を聞入王ども依之行者も御力及ばざる量
も此り王御心さらになし此上恐び光んと思ひたこうり王ひて御母公への御遺物の
為我木像を作り是を側に置王ひ母公見王ひて其容貌の能相似たるを譽
王へ行者御心のうちに深く喜び夜中に恐び光んと要意をなし王ひりる光
常に着し王ひ衣八白栲なり栲八木の名なり木の皮をとて織りて染ぜ其後
用ゐるを白栲と云なり倩倩なるを專一とも持統天皇の御制に白栲の衣
さしせり天の香ぐ山とゐる、あらたしき着類のなんども白栲と志やうく
なるを詠王ひしなり行者八不淨をふくきらひ王ひ下駄をもき不淨穢れを
踏王ぜ齒の高きを壹足戴すなり御手に持王ひ錫杖の頭に五つの水どある八
地水火風空の五躰に表し四つの鐶八須弥の四列三つの鐶八陰陽なり右に六つの鐶
八眼耳鼻舌身意の六根左に六つの鐶八色声香味觸法の六塵なり是を振音

を聞音六根清淨なりしめんとの方便の器なり役行者の用ひ王ひ頭に角
帽子手に獨股杵錫杖足に下駄此外八なり義覺の代に至て始て頭巾を用
ゐ是八眞言法を行ふ也五方五智の如来守護し王ひとて五智の宝冠と号を
東方降三世明王南方軍吒利夜叉明王西方大威德明王北方金剛夜叉明王
中央大聖不動明王是五方五智の如来なり折形の十二有八十二因緑に表し色の
黒き八十二因緑最始の無明なり又叡を帶る又降魔の利劍と号し諸神の守
なり眞先八幡大神焚鋼八具利加羅不動明王鋼の高さ八開運出世の摩利支
天鐶の九さ八十五夜の滿月に表し緑と頭八陰陽なり右の目貫八胎藏界の
目貫八金剛界如是諸神の守なり又曰義玄の代に至て宝冠袈裟を着し又
を懸義眞八宝冠を着し數珠袈裟を持て寿元八角帽子袈裟を着
し又素を持て以上山伏五代の次第なり行者八自作の木像を殘し夜中

忍ぶ金剛山へ急ぎ玉ふ。母公ハ閨中ゝに在て。夢ゝも忘るゝ事なく召ざんども。流石ハ母子の
情なれば。行者ハ心苦しく思ひ給ふ故。起出て窺ひ見るに。行者ハ燈の
下にかゝり。像ゝ胸さゝぎ〳〵て。心苦しく思ひ給ふ故。起出て窺ひ見るに。行者ハ燈の
ことゝ居給ふ。母公ハ母屋に入給へど。胸のさゞめき弥まして。寒いりもせずして。
つくゝと居玉ふ。其間に行者ハ。山の半腹に登り玉ふ。母公の御眼に木像を実
に行者と見玉ひ。行者御心を立て。御貴物に作らせ玉ふ。かゝる不思議の
ありし事。此木像こそ尊とけれ。夜安置せ給ふ。母公夜のあくるをまちかね玉ひて是
まで胸の苦しゝ事。唯ならぬ事なりとぞ。行者ゝ此〳〵とかくしかくやと。行く見るに行
者ハ禅のごとく。そこ〳〵とかゝるぞ。燈のことに居給へ。詞をかけ玉ども。さゝに
答もなかりざんハ不審に思ひ。近寄見給ハ。行者ハ眠りて木像なり。母公大ひに
驚き。かゝて出家の望ありんハ。此木像を身かわりとして出行し給へ。前に此
木像を作り〳〵時。よくもたがゝの相似たりとおもひ〳〵も。却て今ハ歎の種う

らめしの木像や。いのちる山に隠ゝとも。尋ゝ出さでなるべきかと。其まゝ戸外に出
給ふ。まだ黎明に間もなられん。唯夜〳〵として木もへなりそよ夜嵐の外にハさらに音
もなく。俟とともに急ぐ。心ハ飛行どおりにまろせぬ老足のかよわき其身を
顧ず。金剛山へ近付て遥に山を見なぐれど頃しも秋の末なれハ。空かき曇り時雨し
て幽にさへも見分難し。峡岨の岩も厭ひなく。登んとすれハ一足も進ず獲ず下んとす
れハ甚易し。是ハいかに女人を禁じ玉ふと。子を思ふ親の心のかなしさを。ものゝ
せ給ふ一度の登山を。免し玉へと称耳ことゝして。登んとすれハ不思議や葛藤がらみ
絶たる如くなれて。出し〳〵も登る叶ず。五障三従の身なれハ禁じ玉ふもことわりなれど。
死て子に会ざるハ。是三従の一なり。小角と云家子のあとをこひ慕ふ。母なれハ見免
し玉へと伏拝く。歎玉ぞ。ありんなり。夜もすがらくと。明方ちかくなりれども。山高
ふして霧深く見上るさへも叶ず。登んずハ猶難し。進退こゝまきわまりて。行

者ハ何れも居ながらせめて一度ハ中ゝて此母の歎を休をエヘかゝと声を限りよなきさけぶ其声山よひびき麓ゟ聞へと哀きなり。祖釋尊擅得山より車輦と云童子をかゝへ玉ふ時ゟ童子庵所を志ゝ登んとすれども。かなゝぞ麓ゟ歎き悲むを後世かなゝみの譬とも今母公の庵歎も思ひのとさんたり。抑葛城山ハ日本最初の峯ゟして。諸神の天降り玉ふも多かりき是故ゟ神徳山と申なり。女人禁制ハ當山ゟ限りなく富士浅間高野比嶺湯殿出羽の外。諸方の霊場ゟも禁制し玉なり。玉那經ゟ女の十悪を説玉ふ一ツゟハ初て生らゝ時男子なれバ父母大ひゟ喜ぶ。女子なれバよろこ尼ぞ。二ツゟハ養育するに頼母しげなふ〳〵。三ツゟハ女人ハ常ゟ人を鬼ぞ四ツゟハ父母常ゟ女子を他人ゟ嫁を苦ゝとを。五ツゟハ父母と生て相別離。六ツゟハ常ゟ夫のきげんを伺ひ。起坐さんゟを恐る。七ツゟハ懐妊〳〵難産を憂ひ悲ゝ。多く死もるもなり。八ツゟハ幼少の時父母ゟ検録せられ。九ツゟハ嫁して夫婚の為ゟ禁制せらん。十ゟハ老く兒孫の為ゟ制訶せらるとなり。後の三ハ三従法華ゟ五障を説是を女の十悪五障三従の苦と云故ゟ名山霊地ゟハ必女人を禁制せ。殊ゟ真言を持誦して悉地成就を求る者ハ。女人を遠ざけざれハ呪験を得ぞ。般若経ゟ真言を持る者ハ。寿夭星さとるゝ。眼中ゟ流入〳〵。雙目を失〳〵て盲て所見なくとも。姿を觀視〳〵。種々の相好美艶を分別せざれ。念誦者とゝて。威力なのらしむと。種々の嚴誡有是故ゟ女人の登山を禁ド玉なり。狡も行者の母公ハ。岩かどゝとりきて。声を限りに泣さけび息も絶々ゟなりて在るゝ。夜も明がさゝなりれハ。里人どもハ柴薪をとゝん為。例之通り五七人ゟ連て麓を通りけるゟ。女の位声。幽ゟ聞へけるゝ。皆立ち耳聳て是を聞ゟ。其声の哀のまれなりれ。犬ゟ驚き是ハ必朝とく出く狼などゝゟ食ゝならん。速行く助んと。今ゟ早く若者どゝ。手毎ゟ鉞鎌うちふりて。木の根岩

木像よのこしく
行者金剛山ゑ
登り玉ふ

かど厳しなくて登りたるのりさま。日頃なれたる嶮岨の道。平地を行よ異なら
ず。近身見まへ八人の女臥居るだかり。虎狼のたがさへさらよ視へ。能々見るよ。里人よ
八分なりしなかの女なり。皆うちうて炎抱し。如何なる人よて。何故此處よ居玉よぞと。と
懇懃よ尋れ八漸々よ涙をなしぬぐね。恥のしながら。我子の別離をなしして此山よ
登八とせし者なるが。女を禁制しまよ故放足も登り獲ず此悲しさを。察し玉へとなり
れ八。里人猶も不審。其人の名八何と言。又何まの里の人よてなるとも哉と。向へ八茅原の里
の小角と云者なりと。聞く皆々仰天し。狐八行者の御母よてまし坐ぞ。驚き怪なるべども
なり。行者此山よ登玉八。必ず深き訣なるべし。又御母のなるまを玉ふもさなるべなれど。昔
古より。當山八女人禁制よして。人として女の登りし例を聞ず。ずく里へ御歸なれし
と。御手をとり。引起し。若者どもの脊よ負へ八。老たる者八左右より炎抱し。茅原の
里へ送りる。此御歎きのなりし所を。足摺の岩と云。又外よ足摺の岩と云一説あり

大和國よ。都藍尼と云持律堅固精修苦行の人なり。仙術を学び。吉野の林下
よ住を。金峯山八女人を禁ずると聞て。たとへ我八凡尼よなりとも。伊戒嚴座薫
修年々し。登るとも。何の苦鋪る欲のとんと。則金峯山よ登んとを。此時像よ。
雷電霹靂して。天地晦暗となり。路よ迷ひ登るを不獲。策たる杖を弃る。植
て。蔵々大木となれり。尼又龍を咒して。乘て山よ登るよ。進むるなりて。尼大いよ
瞋て。嵩巒を蹈バ皆盡崩裂。今足摺此よ。足跡多く残まり。其龍を養て今
まなり。都藍尼八仙女よて。終所を知らずと。古書よ見えたり。却説行者の御母。里
人よ助けられまして家よかへり。歎きても歎なきまるを。唯遺像を行者と思召。朝暮是
を愛し。主をを哀れなり。行者御登山のまを。今八天下よ隠まなく。天智天皇の叡
聞よ達し。直よ行者の鋪地へ。三の堂を建立なるべき旨。勅命を下さる。皇人前
年。鍬足公難病よ臥。他力よ及ばずと。行者の祈力よ仍て全快なり。齋明天皇

行者へ高位を賜ふべき旨勅定ありしかど行者高位を望まずと深く辞して請ず。其時再勅を下し玉べきを菅城皇子天智天皇行者の本望を達せざるるもやと思召さ能ありほうんと再勅を止えて待ち給ひ故此度一宇の建立を思召立玉ふなり。鎌足公も思しめを旨ありりんば早速茅原の郷へ勅使を下さる。行者の母へ勅命を通じ並ず地を見きるえ早く建立の手當を仰渡されける。行者の御母喜び限りなく不日にて地を清浄まし。番匠八良桟を撰ぶ石八石を集え地を堅ずし。東天の須より日役を至るまで。懈怠なく働きけるや早速に成就し此由奏し奉る。叡感不斜。茅原山金剛寿院吉祥草寺と云号を賜ふ。一名茅原寺とも云ふ本堂ハ五大尊を安置し。伽藍神の社ハ熊野權現を勧請して行者堂ハ御自作の御遺像を安置を三十二歳之尊像ハ本堂の側ハ香精水笈懸杖笠等の御遺跡在数當山を鎮明天皇の創建ましまして。役小角開基と云傳へり。然れども年歴を考る

行者御誕生ハ鎮明天皇六年也。鎮明天皇ハ御在位十三年。御寿四十九歳にて崩じ玉ふ。時行者八歳なり。然るに三十二歳の遺像を安置をと在ハ不當と役行者御誕生より天智天皇四生まで。三十二年なり。是を思ふに天智帝の御建立なるべきなり。當山ハ安置し奉る尊像ハ格別霊験のなり。是ハ母公の御遺物ハ深く御心をこめ玉御自作なるゆへなり。都て木像画像など多くと雖も滅後相似たるもがくを作りたるハ其霊をとゞめとゝ入り又後世と雖も霊験のあらたなるも在因ハ日高野山弘法大師の御影ハ皇五十四代仁明天皇兼和二年三月十五日。倚床まかり。五十六億七千万歳後仏の出世を待ち當山ハ入定を宗法法燈絶もるなかまと穀水を断ち彌勒の号を唱へ玉ふ。時仁明天皇の勅命ハ御影をうつせ。空海自筆を執て両眼を入玉ふ是真實の開眼なり。同月廿日寅の上刻入滅なり。御入定の地を高野山奥の院と号を。伽藍の地を擅上と号ふ則

檀上に御影堂を建て其内に安置せ一休禪師山城國木津川の西薪村刈思庵に住せ玉ひし頃八人皇百代後土御門院の御宇文明十三年の春の末より御入滅の近きを志し召へ京都より佛師高慶と云者を召し當年の中に入滅せるやへ豪客顔を能うせし木像に作らべしと仰付られバ高慶畏こまり御そがらを よくうけ京都歸り家内を清め身八精進潔齋して心を盡し日を累ね漸々に仕立早速長櫃に納め是を持せて薪村に行禪師の御賢に入る御心かなうまでとて直に鉋をとつて二ようち割り價の銀を渡し今一度心を改めて作り來るべしとの事八高慶恐入て立かへり御遺像のうち格別に心をはくし精進潔齋はたまとも俗家のうち不淨そもそもなりしかと考へると無さ上に心のゝうもなし。こんなより五辛肉の類ひ云に不及好の酒さへ呑ざまバ不淨のうべきやうハなれども唯心にかゝハ家内に女のありし更欲此度八まづ女を退んとおもひ妻を親里へつゞけ

又改めて家内を清めて細工にかゝる月を累て成就しる更以前の切く薪村に行て禪師の御眼通りに差置き此度八格別清淨にして細工仕りしに御賢下され度と云禪師是を見玉ひ以前の作に大ひに劣る甚愚作なりとまた鉋をとりて うち割く新にせよと下男に渡し物高慶にむかひ汝八近代になき細工にてなりしぞ。我遺像を何とて如是不調法なるや。なかく立入者に他へ八中にけぶによく動妄して作らべしと。價の銀を帶りなく渡さるけつ高慶八言もなく歩し立服のまて銀子を請く急ぎ京都へ歸りたく思ひ八精進潔齋に及ぶ罪なき妻も親里遣やり。互に不自由なるも厭ぶ心をつくしたるに例よりはかゝぐきうと迷なし是以ぶ彼の禪師の敬ふぶ金銀のつゐをと厭ふ世界に遠ひなし此後八作料なさへなきハ善悪の心配に及ばずと。まづ妻をよび戻し始末を詰て價の銀を渡し。まづ今只精進のげに盃を傾けと云バ女も笑味を含て云る八禪

師の戯れ今までぬるせば必ず心かけ手なと早々酒肴を調ふ来り。互に此頃中の
休しかりしとかくりのゐ終に醉と催し。其夜枕を同して臥るる。翌朝より細
かくると虽もさくに慎もなく。日を累ひて成就したるを見たかりしるもなき
也笑ひながら是を持せく。洲恩庵に行心中に可笑るに思へども。禪師の佈眼通
に差置慇懃に頭を下此度心よく学ばくし。仕のげたれば篤と佈賢下され度と言
へば禪師是を見く須更無言し。高慶の曰如何有之哉又思召に叶ざる欲と伺ま
禪師答て誠に上作せ感入ると價の銀八定の通り。別に優美の銀を賜り。我真像と
是なりと仰を聞て高慶底きみのしく歸りる。是を考るに真の上作と是なり
始め両度の作ハ刀に勢ひなし。三度めに作りしハ心を労せずして勢ひあり。都て磨き
たる細工ハ美艶きだのりにて。勢ひなし。甚五郎なと云名作を見るに目を顕し
美艶を不好。刀の勢を專とせ。高慶が作も是等の類ひなる欲一休禪師ハ大德に

て入滅の近きを知く。遺像を彫せ同年十月下旬に至りへよく佈入滅近きよし仰に仍
て僧俗の差別なく高位の貴人まで群集り。佈遺言を伺に。禪師枕をのげて
死らせぬ。何處へも行ぬ此所に居る尋て来るなふとの八言ぬそ
と曰ひて。木像をまひきて休くと仰のりれハ。木像ハ三度まで。なぐきしと見へ
たり。禪師八十月廿三日八十八歳にて入滅し玉ふ。是より一休禪師のく系ばきの木
像と云ふなり。まく曰く親鸞聖人蕎麥坊の木像とよすハ。叡山南
谷無動寺よりり。是ハ聖人年名をいまぐ鶴滿丸とよ。慈鎮和尚に仕へ
玉ふ頃六角堂観世音へ百日参の詣の大願を發し。忍びて参るるもへ若師の用
事のなハ友身に代く其用を便せん為自作の木像なり。或時夜中。師の蕎麥坊を好
ミ玉ハ木像代く其用を便ぜ。故に蕎麥坊の木像と云傳。是難詰き說なれども世に
ひく云伝に都て其人の深く心を名しハ不思議のことの欲

都藍尼
登山しく
つのしもり岩の
印しを
のこもと

一言主之神出現之話

並法起菩薩之伴土を拜し行者仙術を獲玉ふ話

瑜伽論曰在家煩撓若居塵宅半家閑曠猶処虚空此故正信應捨家趣非家とあり。行者八毋より別離。桑家金剛山よりおもむき玉ふ。我為よりの忠九族の為よりもあらず。一身を擲て一切衆生の為の登山なり。頭に角帽子をいただき白栲の衣を裾短に着し。下駄をはき。右の手に錫杖を突。左の手に獨股杵を持て進み玉ふ。峨々たる岩上に八苔膚をしてて足を止む。松栢繁茂して甚暗く荊棘道を埋む。蔦葛を取つきて。嶮山の八合目に至る。此時像に山中鳴動して大石を投古木を顛倒し。山も崩るゝ如く。音響聞へ眼に見ゆ。行者大驚き山神の崇りなる歟。仙人天狗なるの業なる歟と錫杖を岩角に突。須臾歩を峯の方を見玉ふ。岩の上に立たるものあり。是を見るに身の長丈餘にして面躰赤く

両眼鏡の如し。鬚髯多く甚短く。髮八乱れ身に八裘を着し。履をはいたるよいら民く。鉾を持て大音声に曰く。不浄千万の身として清浄堅固の此山へ登ること難し早帰れと。山も崩るゝ大声に叫たり。行者怒て曰。我幼きより。五辛肉を不食常に孔雀明王の呪を持誦し心に欲ることなく。精進潔斎の身なり神なき八知恵べし。汝必ず鬼魔の類ひなるべし。悪鬼八忽鉾をあげ。進みよりて戦る。一来一往一上一下と。壁立龍の水中に玉を戯ぶが如し。虎山中に飢たる時。食を爭ふが如く。戦ひ數刻に及び。悪鬼八力不及鉾を捨て逃去る。行者怒て是を追ふ。三度だかり。終に走がくを見うしなへり。次に谷間より黒氣吹出し。道をふさぎて。進ず不能。尚其中に殿く悪鬼顕出て弓矢或八鉾鐵鎚斧等をさし。てひのたり。行者兄力をつのりて。獨股杵を拖玉八黒氣忽ちに晴て。のまさの悪鬼ども炉くうせにけり。又登ること二丁ばかり進

王八大蛇道ニ横ハリ。首尾ヲ伸ラシさぞ。其長きコトこの上難し。行者ハ〜も驚き王ハ踊り越んとして進ミ王ハ梢ニ光り物有りて。如日月。是を見るニ大蛇の頭ニ如日月の如く見て八両眼なり。口を開き。火焔と吹頭上より。将ニ呑んとせるの勢ひや行者怒て。不動威怒王の咒を持誦し。錫杖をいゲて大蛇の真中をてゝとゝち王ハ大蛇両断となりて。左右の谷ヘ落入たり。如是坊げ三度ニ及ル。悪鬼天狗などゝ云者の業なる歟又山ニ神在て。行者の咒力を誠ニ歟何程とも定え難し。行者ハいよ〜進ミ登んとして王ハども。嶢々として容易かゝぞ。漸々山嶺ニ登る。時ニ曉天の頃なれバ東方ニ向ひ。日出を待。此所ニ菴を締びて居し。常ニ孔雀明王の咒不動威怒王の。真言を持誦し王ニ。今の行者坊是なり。如是修行要時も怠ラるなし。悪鬼又是を悪ミ。鬼となり大蛇となり種々ニ変じて。坊を苦しめとゝ。行者歩〜も動ず王ハ。或時一人の美女来て。行者の前ニ座し。額つきていへハ

家ハ葦の里ニ住女なり。幼ク〜て母ニ別れ。継母の為ニ苦しめられ。命を捨んと思ふ。是を思ひ時節を待。〜も三年ニ及び。継母の悪どん邪見ニ。ろ〜志のびぬ。尼ニなりて。佛の道ニ入バやと。思ひたゞまど。師と頼むべき方もなく。行者ニ願ひもよさんと。思ひ。此山ニ登り王ハ。と聞し時の其かなしさハ。何ニたとへんものもなし。女人禁制の霊山なれバ。力なよ〜。憂ことなんと。思ひ侘て。ひるる。我誠心の天ニ通じ。神仏のひるれ王ニや。昨夜忽然として。人の約束りて。我ニをとつくひき立王ニとまでハ覚し。其のち八さとニ覚なし。今此霊山ニ来り。偏ニ神仏の救ひ王ニなるべし。何とぞ師匠の約をなし。五障三従の身を救ひ王ニぞ仏なりと。美王の如き面ぜ。ようかむ淡ハ海棠の露をふくみ。ぞ〜ぬ。ちぢ王ハ見へ。年の頃ハ三十歳ばかりの。賤の女なまど。黒髪ハ甚ニ長く。後ニ無れ。色白くやさ〜き女く

久米の仙人なりけり。通力をうしなひ。雲よりやなちん川よやたまちん。行者ハ悪鬼の變化なるゝを。知召せ〻詞を發し玉ふ。行ひをまして。なをしれバ。女ハ火しくゝ頭をつゞ。合掌し。行者をとゞめる。西さし。艶色十分ゝして。傾國の相を顕し。如何なる大道心も。魂を奪ハんばかりなり。行者大ひゝ怒る。獨股杵を美女の眉間ゝ擲玉ハ。忽本相をあらはし。逃出る。其をゞく毛色黒く。口長く。両眼大ひゝして。甚やせたり。如何なる者やその名を問ゝ。行者怒る。錫杖をつゞく追玉ハ。谷間ゝ隱れがくれ見へざりける。是より後ハ。坊るとのもなし。行者いよ〻行ひ堅固ゝして山神を弁せんるをの〻祈り玉ひける。當山を神徳山と号るゝハ。諸神の天降り玉ふ故なり。當山ゝかぎりなき。都て高山ゝハ例しなきなり。古書ゝよれる考るゝ古史平田篤胤大人之撰曰。於是束須佐之男神。以其天之蒹雲之劔。此者雲劔也。吾何敢可安於私乎。宣而。遺五世之帝孫。天之菅根神。參上天而上奉于天照大御神。而後居坐于熊成峯。而云云。熊成の峯。熊野のこゝなり。昔ゝ木の國と云。五十猛之神。木の種を植玉ふ。木の國と号なり。紀伊と改めしハ。和銅年中のなり。此故ゝ山深く木多し。又同じ文ゝ曰。於是。詔命。天日高彦穂瓊々杵命。而離天之磐座。而云云。於天浮橋。浮渚在曽理發而。排分。天之八重棚雲而稜威之道分道別而。果然天降坐于筑紫之日向之高千穂之久士振峯兵云云

舊事記曰。饒速日之命。乘天岩船而天降坐。何ゝ國哮峯。則遷坐於大倭國鳥見白庭山。所謂。乘天磐船而翔行於大虚空。巡覩是郷而天降坐。兵虚空見日本國是歟

如是證文多けれども。畧して。てゝにのハさ玉。然れとも。何れの山ゝも守護神在まゝ。下野國日光山ゝハ。薫一統日光大明神。山城國雄徳山ゝハ。栖尾明神。紀州高野

山ハ丹生明神高野明神是皆地主神ヤ金剛山之地主神也杏狭生葉と云此
神ハ大己貴尊唐土天竺之國とも造り終りて日本へ返り玉ふ時連来りて葛城
山ハ吉野玉と云此説ハうけがたし仍て生現の條ハ本説を顕さ只愚案也
ハ神霊のとゞまり玉ハ諸木繁茂したる山より高山と雖も樹木なき山ハ神氣
不集神氣不集ハ呪力をほらうとする故ハ諸宗の祖師山を見たてその
宗の本山とする也考るハ聖道浄土ハ仍て本山と号る地ハ差別有天台宗ハ唐土天
台山智者大師ハ始玉ふよりて山の名をとつて宗号を立る然ども法花経と止観
とをとつて建立の宗門なれハ天台法花宗とも云また止観宗と云念三千の理を
教る故ハ闕たる所なきを以て多宗と号日本の祖師傳教大師ハ唐土の天台山を
うたして叡山をひらく古木生ひげりたる高山より神氣のゝるを知て開き玉ふ故ハ
阿耨多羅三藐三菩提之仏達我立そまよめりらのゝせ玉へと詠て自斧を持て

一番ハ山入したゞ若山神の怒り有ハ崇り ハ我身ハうけんとの心なんべ〜真言宗ハ大
日経蘇悉地経金剛盤若経を依経と〜顕密二教なり即身成仏と教へ阿字本
不生と悟る大日如来の密法を行ひ祈祷を専一とする也祖師弘法大師紀州高野
山を開き未世ハ至りても山の木をきるゝを禁ぜ是を禁ぜされハ後世ハ至りて破
戒の僧出て山を切ぶ木を切たや〜なとも〜其時ハたゞのゝ神氣ちとろく密法
を行ふとも呪力を顕さゞ難く自然宗門の衰微となりゝを知て禁じたる也
法華宗ハ法華経一部を執て餘経ハかゝぜ宗門を建立現世の祈祷を旨と
する也祖師日蓮大人ハ身延山を開く是のごとく祈祷を専一とする宗門ハ深山を好
て開山する也禅宗ハ楞伽経首楞厳経金剛盤若経と
依経として宗門を建立する也教外別傳不立文字と云又都莫思慮とも云
悟道を旨とする也祖師榮西長老ハ京都市中ハ建仁寺を建立也五山何れも市中を

遠く去て。浄土宗ハ無量寿経。観無量寿経。阿彌陀経。此三部経を往生浄土論を加へ三経一論とと引く宗門を建立て。念佛を進め。西方極楽浄土へ往生と教へ吉水を本山とも。今の智恩院なり。現世の祈祷をかゝるゝ。此ものを何れ少てし所をきゝハて。まさ兄力をつゝハ。現世の助となきんをハ深山を分く。神氣集る所をつゝもてんバ功を顕し難し。却説役行者ハ金剛山の森々たる霊場を在く山神の出現を祈玉へ。夜も深更を及び。茆庵のまへを一女。忽然と顕またり。其姿を見るを長き紐の裙をむき。頭をハきをとてかぎれるものをかむり。手を檜扇を持面をかくし。そのさま皇后の出立を異なるゝ。行者是を見て。怪物をのゝらざるを知り。如何なる人をましはもやとつゝれんバ我ハ一言主之神なり。行者の勇猛精進を感じ。今爰を現る。當山清浄堅固の地をゝて。上古より諸神の天降玉ふも多くまゝ。法起菩薩常を比丘僧をなく集会。毎日説法し玉ふなり。是をも聴聞し。いなく行ひ平く。懶怠なく

ハ。持明仙となりて。通力自在の身となゝんを。疑ひつるべのゝをとさはゝくかゝるを玉ひくまゝとの幽谷を分く。姿見へ玉ぬ。扨一言主之神とハ當山地主の神なゝ。須佐之男之命の御女なり。舊事記御客鶏の醜を恥く幽谷をかくれ。晝出るを嫌ひ。夜も深く更を待て出玉ひ。行者を逢ひく。扇を面をかくし。恥玉ふ。石女神の御慎なり。雄略天皇葛城を獵し玉ひ。天皇と轡をならべく。獵し玉ひ。天皇霊幸の時。本目川まで送り玉ふ。此神の書出玉ふハめづらしく。天皇の御徳なりとく。村民。有徳天皇やと云ゝ。古書を見へたり。三代實録曰貞観元年正月廿一日。一言主神を從二位を叙せらると在。如是正し神を。悪神のやゝに云。大ひなる誤りや。雄略天皇御獵のとき不禮を怒主佐國へ言主神を配流をと云。又役行者。岩橋をかけんとし玉ふ。妨をなし。役行者石縛して。深谷をはなく。此所を一言主谷と云。越智の泰澄和尚ハ

役行者邪魔を拂ふて金剛山に登り給ふ

不思議の神人ゑて咒力を得く。葛城ゑ来て試ゑ。一言主の咒縛を解ゑて。一心ゑ加持ちるゑ。三帀既ゑ解。ゑ時空中ゑ声有く。叱りて曰。何ぞ邪佞の神を憐むやと。和尚恐まく咒を止るゑ。石索又本の如くゑ縛をと。又云役行者ゑ石縛せられく。行者天位を望む。謀叛有と。帝へ讒奏し。行者を伊豆の大嶋へ流をと。在り。是等ハ皆何まも安説ならん。正しき書ゑ在とも。始末の不都合なるハ。證ゑ詰難し。慥なる證據を考合して前後相應のるをよしとを。一言主神ハ。御客貌ハ醜しと。虽も。正しき神なる證據を云ハ。葛城の絶頂ゑ本社ゑ。里人参詣して。五穀成就を祈り。社を森脇村と云る所へ遷し。長柄村。豊田村。宮戸村。寺田村。多田村。以上五ヶ村の氏神ゑして。式内の神なり。又古奇を見るゑ

文木集　逢ゑ伏よりとや人も笑ゑとて一言主ゑ祈きそかけつる　顕昭

續古今　君を祈る唯一言の神のゑ二心なきをわとハきるしん　加茂氏人

此外古奇多くなれども。何まも邪佞の神と詠たるを見ず。然まども。御客がさハ醜くかりしと見へたり。後世ゑせ伝と云る翁。大和國を行脚して。葛城の麓をぐるゑ。山々の花の盛り。明ゑの如し。甚艶なるを見て。猶見さし花ゑ向けやく神の顔と詠ゑしハ。是ハ御客貌の醜と。古く云傳へしなり。後世まで山の絶頂ゑ宮居をのこし。五ヶ村の氏神と宗久まさ。葛城の神と詠たる奇も多く。式内ゑ入く。葛城山の神なるゑ。疑ひなし。然るゑ。役行者石縛して。幽谷ゑ住ながバ山を押掠ちるゑ。是非道の振舞ゑなるを。行者ゑ。是を。行者ゑ咒力を云ん為ゑ。矢もなく云込めし。昊員のいきだあれと。云へる類ひなる欤。かの仏法大師行脚のとき。木ゑ向る柳と見く。我ゑ一つ絶せと云ゑ。怪くまく。俗しと云。此故ゑ其所の柳。俗多くして食きぞと云ハ。我も求る物の。得易かとんゞ為ゑ。思付く仏法大師

を賤僧ふしたり。是等皆同じ類ひあらん歟。行者岩橋をかけ玉ふとき。妨
謗もる者八外ふ居り。是八其條ふ居らるを。行者八一言主神ふ逢ひく後。法起
菩薩の淨土ふ至んゆを願ひ。怠なく修行し玉ひ。或時遙ふ犍稚の聲を聞
尋て深く入玉へ八。三千餘の床ふ。大比丘僧列坐して。布薩を行ひ。籌を行玉ふ
行者も籌をとりく。衆ふ交り玉ふ。威儀嚴肅。如來在世の僧ふ異ならぬを。説戒
の相實ふ城なり。まく南方ふ法華讀誦の聲を聞。其声ふまくゞのゐく尋
行ふ。巖石峨々として。豈窟重々たり。三千餘人の仙衆此洞ふ住せり。又東方ふ鐘の
音あり。爰ふ鬼王忽然として來現を。行者鬼王ふ問玉ふ。此鐘八何まのがゝぞ
や。鬼王の曰。法會已ふ時至ゆ故ふ。集會の鐘をつくなり。行者まく問玉ふ
法會と八如何なる法事ぞや。鬼王の曰く華嚴の法會なり。又ふ是を聽聞せ
と思ふ叶ふべくや。鬼王の曰く容易かゝぞと雖も。御志の深く八引道して奉ゆべし

我白をごとく。印明を結誦して玉へと。昂教ふ曰。先心經一千卷を誦をべし。又
如來の拳印を結べ。淨土變の真言七遍を唱へ。秘印を結べ。毘盧の真言
を念誦し。眼をとぢて。仏眼の印を結び。同真言一千遍を誦して。後ふ眼を開
き玉へと。教へれば。行者大きふ悦んで。教の如くして眼を開き玉へ。此山廣博
嚴淨微妙の淨土となり。七宝の宮殿簷をならべ。金繩道を畫へり。中ふ大
法起菩薩坐して玉へり。四疊ふ床あり。大比丘僧三千餘人列座ゆ。又其外ふ金銀
珠玉の床あり。或八錦繡をしく。或八虎豹の皮を鋪。三の坐の上ふ。神仙龍王夜叉
羅刹等列坐して。各々菩薩の説法を聽聞を。仏虚空ふ住して。菩薩の
頂を摩て授記して玉へ。菩薩八教勅を請て。大衆を教化して玉へ。天鼓伎樂苦空無
我の曲を調べ。風の聲宝鐸の韻き。實相圓融の妙理を説。後ふ高山聳たり。是
靈鷲山なり。前ふ八功德の池あり。五色の蓮華。芬馥盈滿せり。天より微妙の香花

をふりし。異香郁然たり。光明照耀して。日月の光りに超たり。奇特不思議の
る。言語の及所にあらざる。行者此淨土に〻して。見佛聞法の故に宿住智を得く
歡喜極なし。其時取玉の箒。今招提寺にあり。彼の引道せし鬼王。深波大
將なり。此淨土を拜せんと願人。深波大將に祈誓をべしと在り。今金剛
山本堂の傍に在鬼面。則此深波大將なり。又金剛山を兜率内院と云。法
起菩薩の尊像を拜まる。忿怒形にして頗轉法輪菩薩に似たり。轉
法輪菩薩則弥勒菩薩なり。此故に兜率の内院とかなり。新華嚴經四
の十五諸菩薩住處品に曰。海中有處。名金剛山。從昔已來。諸菩薩衆於
中止住と。現有菩薩。名曰法起。與其眷屬之諸菩薩衆。千二百人俱に
常に在其中而演説法。故に古より。佛説に出たる。法起菩薩の淨土なり。又曰
新羅國にも。金剛山あり。國王の子。金地藏出家して。金剛山の白川洞に入て

修行をる。三十年とあり。志ゑれども。華嚴經の所説。日本の金剛山なる事
文中に。海中有處とあるをとるべしとあきらかなり。真言傳に曰。唐土之靈真
和尚來朝して。戒律を弘通し。熊野に參詣る。十二月晦日。大峯に入
是晦日の山伏の始めなり。次の年四月八日。金峯山に出て。葛城之峯に入る
五月八日。金剛山の正覺門の北より。尋入て。法起菩薩の説法を聽聞せると
在。是等皆佛意に叶ひし人なり。行者ととより。精進潔齋の身なれば
當山に登り。岩上に坐して。在家の修行とは異なりて。食を求めたりとなし
松の葉をとりて食とす。是は飢を志のがんためなりにのらず。食を斥く寒暑を
厭ふ身にて。飛行の術を得るなり。依之仙家にとんことを願ふ者。松の葉を
食とし。飢をうまるゝことあり。松は霊木にして。万歳の寿を保つといへり。皇國にては
常木とゝなり。唐土にて固と云る人。腹に松の生たる。夢を見て。是を占に。松

の字を分く見れば十八公とあり。故に十八歳にして上三公の位に昇らるゝ。不遠して三公の中に入るといへり。あゝ曰く。癸の始皇帝は五岳巡の泰山に登り。獵しに時に俄に大雨降り来り。雨具の用意もなくざんば。始皇帝は。松の木に馬をよせて雨具を急ぎ求へば。従者は君の怒を恐れ周章して。駐めぐまどゝ。其用を便じ獲ず。始皇今天下に心に叶ざるなし。然るに今。雨具に逢ひて濕るの甚たゝしきことたなみなく。今此急雨を志のぐものなくば。孕く優美せんとあるを高声にはばかり玉へ。不思議や松の枝を重まで。葉を重ねて。雨を志のぎけり。帝驚き玉ひく。大夫の官を賜ふと云傳へ。是はいやしきなれども。松は其徳功甚多し。百年にして花咲實を結ぶ。千年に十度なり。千歳を祝ひて。ながらへと云へり。李は茯苓琥珀などを生ず。諸木にすぐれたる木なれば。木の公なりと云意なり。松の字を作りしなり。此故に。後世に至りても。仙術を好む者は。松の

葉を食とし。茯苓を製し。餌にして食する事なり。製法は秘傳なるべし。

乗雲にのりて。しがさし。行者仙術を獲ん事を願ひ玉へ。飛行自在の身となるべんば。衆生を化度せんこと難しと思召故なり。松の葉の外を不食山神を祈り。法起菩薩を念じ。晝夜の別ちなく。行ひ玉ふ。夜も深更になりて。如夢教となるとなり。是深山の奇特なり。終に通力を得て。五色の雲に乗じて。上八四王自在處に登り。下は龍宮仙府に遊ぶ。悉地成就の持明仙人なり。天竺の法道仙人。天竺の五百の持明仙人の中なり。日本に飛来りたるなり。是等のたぐひなり。日本にて仙家に入例を見るに。人皇十一代垂仁天皇の皇女倭姫命は伊勢の齋宮に立玉ひ。御寿五百歳に近し。雄略天皇二十二年四月伊勢の山中に入岩を開き。窟に入て見へざる。武内大臣は景行天皇十二代の御代成務天皇十三代之帝仲哀天皇十四代之帝神功皇后十五代之帝應神天皇十六代之帝仁徳天皇

十七代之帝之至て六代の間執政し給ひ又神功皇后に仕へ奉りて八三韓を征し其外諸國の夷賊を亡し仁德天皇の御代となり今天下泰平なれども是より諸國を巡り観察し逆ふ者なくば安らかに國ふとでまくんと願ひ給へ帝も御心のごとく思召と雖も敕代の勅功莫大なれば止えうも玉ひく願のまゝに免し玉へ武内大臣是より諸國を観察して逆ふ者なきを終ふ因幡國ふ至りて幡を立さ免玉ふ依之幡因と云意ふて因幡國と云なり同國亀金と云所ふて岩の上ふ双の履をのこし夫ふ登り玉ふて再びもとがゝ八見へざなり玉ふ此外仙家ふ入る人ふ八茶毘和尚勝尾寺善仲善算仁鏡法師久米仙人大伴仙人安曇仙人七百歳陽勝仙生駒仙藤太王原太王松室童子仏法大師伏見之翁行叡居士教待和尚行基菩薩若狭之白比丘尼一名八百比丘尼是等日本之仙人なり都て仙家ふ入る人八命終なきるなり行者八今ふ唐土ふ在て日本ふ飛来して霊験をあらはし玉ふなり

摂劫箕面山唐人戻り岩之話 並元山上義覚義玄之話

行者金剛山の頂ふ居して朝毎ふ天地を拝し東方ふむかるゝ八日出を礼雀明王の咒を持誦し次ふ南方次ふ西方次ふ北方なり是のごとく四方をおを或時北方ふ向ひ奇霊氣立のゝ事天ふ通ぜ是を見て菩薩の浄土ふ向ひを走り山を下り氣を志とゝ摂劫ふ分もむき山中ふ分り川を渡り流れふ近ふのぼり見ば一の巌ふ高きゆ二十餘丈なり當山一の大巌ふして第二を瓔珞の巌と号し第三を奥の巌と云第一大巌の底ふ黒龍住り巌の辺りふ金鳥を顕して蟠り其長きこと三丈ふ餘れり西眼八磨り玉ふ似たり紅の舌を舐し鹿の如き角を振り立たるハ恐しきこの音語ふたへたり行者物の

數ともせず。錫杖を振く進ミ玉へ黒龍うごくるかゝとぞ。木石をもて作まる地錫杖を突立く攀躋る。其印〳〵岩角よのこれり。巒の上さ一つの杉ありて。梢ハ共明を放てり。行者近く寄て是を見んと〳〵。根本ハ至り玉へ。彼の光りとの落来て行者の御袖ハ止り。是三股杵なり。依之後世三股の杉と八号ものなり。葉ハ三葉ハ七て。四時ハ色を變ぜず。不思議の霊木なり。行者三股杵を得て。巒の上なる石上ハ座〳〵て。前なる石ハ錫杖を立く。秘咒を持誦〳〵玉へ。後世ハ至て座禪石錫杖石の名あり。三月十七日ハ登山〳〵。今四月十七日。三十日ハ夜の夢〳〵龍樹菩薩の浄土ハ至るゝあり。利剣をうて。衣となし〳〵。長縄を腰ハ結て三股の杉の邊りなる。龍穴ハ入る事。凡一里ばかりハ〳〵て。坂廓あり。石明かゝ〳〵戸ざせり。暫く仲立〳〵て聞ハ。妓樂の韻き幽ハなり。門前ハ跪きて。真言を念誦し玉へ。門内ハ声あり。門外ハ咒を誦とる者ハ誰そと問答て曰く。日本役優婆塞行者なり。問人ハ誰そとのたへ。我ハ徳善大王なりと。直ハ門を開きて。行者を請入龍樹菩薩の浄土ハいてゝらしむ。行者行く四方を見玉ハ。重門高楼甍を並ぶ皆七宝荘厳せり。黄金臺玉階寶の池。優盍羅花。拘物頭花。奇香馥郁て琪樹列せり。霊禽異鳥。和雅の音を發〳〵。妙法を轉ず。宝幢幡蓋薫風ハ飄颻〳〵。摩尼の燈。騰荀の華。光明閃爍〳〵て。心言も及び難〳〵。甘露醍醐の妙飲食。宝器をつゝ〳〵て。其數を尋ぬ。殿の前ハ丈餘の錫杖を立たり。時至玉ハ。振ざらんなる。正面ハ丈餘の鼓磬を懸け。刻限ハ。うさざるハ。微妙の音を發て。菩薩。聖衆。天人。龍鬼。其中ハ滿り。中央の宮殿ハ七宝荘厳の床あり。其上ハ。龍樹菩薩。大辨賊天女。偃然と〳〵て。半〳〵玉へり。徳善大王佛前ハ進ミ。香水を取く。行者の頂上ハ灑き。頂きを擎て曰。汝本所ハ歸り心任せよ。興隆せよと。秘密を傳へ玉ハ。行者身心適悅〳〵て。水上ハ浮ミ昇

葛城の地主
一言主神出現

と見て夢ハさめたり。行者感涙を流し。不日龍の下の西の側ふく。荊棘を刈拂ひ。巖をひらき。草堂を構へ龍樹菩薩並ニ辨財天女の霊像を。等身ニ造り爰ニ安置し。同年十月十七日開眼し玉ふ。是一ツの不思議なり。三月十七日ニ登山し。四月十七日龍樹菩薩の侍士ニ至り。今十月十七日ニ仏事成就をなす。思ひのまゝにべし。次ニ徳善大王十五金剛童子等の。護法神之たゝ堂の東北の方ニ小社を建て。安置し玉ふ。當山の龍落合流るゝを箕ニ似たり。彼之箕面山龍安寺吉祥院と号ス。後ニ天台宗根験道聖護院ニ屬ス。行者晝ハ龍の上ニ在て孔雀明王の呪を誦し。夜ハ龍の下ニて大聖不動明王の呪を誦す。如是修行懈怠なし。年月を経て。弁伽羅制多迦の二童子八部衆等。晝夜給仕したまへり。其勤行の地ハ龍の頂き東西ニ高き所ニ。龍の下ニ南北ニ幽閑の地ニ。後世ニ跡を殘す。又常ニ岩間より。涌出る水。玉の如く甚清し。純ハ是をとるに霽き玉。後ニ神水と号す。行者通力自在の身となり。龍の上なる坐禪石より天ニ上り下る事御心のまゝなりしハ後世此所を天上ヶ嶽と称ス。是より嶮難の地を見立て道を踏分山を開き未世の行場ニせんやとおもひたまふ。さゝ禪石とよん。錫杖をつき。高き下駄をハきて。ぴらく下り玉ふとき。山中鳴動して。一ツの大岩。道の真中ニ涌出せり。行者異ともせず飛越て。麓ニ下り玉ハ。龍水盛まく。淵をなす。黒龍蟠く道を防ぐ。是山神別離を惜ミての業なり。と。長二丈の木像を作り草堂をこしらへ其内ニおさめ。山神への貴像として。生玉ハ。盛れし水ハ。龍の流れニ入り。蟠る黒龍も姿を隠したり。行者ハ。やがて山をつゝ。大和路ニ向ひ玉ふ。都説御自作の木像を。安置したる草堂を行者堂と云。又涌出せし岩を後世唐人戻り岩と云。是ハ嵯峨天皇の御宇百濟國の使来朝して。日本の地形を見るニ平ニして。川の流れ穏なる堂塔

を見る。我國より、劣りと思ひ、年〳〵く侮る心ありて、霊場參詣の事を願ひ
れば、直ちに參〳〵奉る。彼が心の慢ったるハ、ちろ〳〵ぬさぢ延幷を免し、主依之
引導の宦人と、副へ、比叡山に登り、百齋之使參幷して、山の名を問、答て是ハ
比叡山延暦寺と号す。則唐土の天台山をうつしたりと云。又問、何と云人の開
山なるや。答て、傳教大師なりと。又問、其傳教大師と、日本の僧なる歟、答曰
日本近江國志賀郡に生れ、十二才のとき出家して、行表和尚の弟子と成
て、延暦廿一年、入唐を願ひ、桓武天皇の勅許を蒙り、同廿三年秋七月出船して
唐土に至る。天台山國清寺に行、道邃法師に對面して、天台の教門をうけ、又
佛隴寺の行滿座主に逢、行滿座主、傳教を見て曰、昔智者大師、告て、我
没後二百年をきて、我法東に入るべしと作り。今汝東より來る。ことゝむ
るなし。不思議なりとて、秘密を附屬し、また、神より龍興寺、須曉阿闍

梨に隨ひて、三部灌頂密教をさづかる。自元年の夏五月、唐土を出船し、延
暦廿四年、歸朝して、經論の書、三百三十餘部、智者大師の持て、金字の法花
經、金剛盤若經等を、叡賢に、とゝなへて、神より、清隴の峯に入り、高尾の道場に
おゐて、真言秘密の大壇を建、灌頂三摩耶を授く。是より後、神宮院に、おゐ
て、灰の中より、仏舍利を得て、延暦廿四年、秋七月、叡山に登り、草庵を結
び、法華經、金光明經等の大乘經を誦し、山の頂に一宇を建て、一乘止
觀院と号し、藥師如来を自作して安置し、延暦廿五年、參聞に
及び、天台法華宗を弘、華嚴、法相、三論、律宗を兼学して、弘仁十三年
六月四日、遷化なりと云。唐土の天台山に比べ、神ハ十分の一なり
必傳教の法力も、龍興寺、須曉阿闍梨に比べ、十分の一なりと、謗りける、甚
悪き過言なり。此外に、霊地ハなき歟と、問依之、評して曰、鞍馬、愛宕、など、分

とも必ず彼が謗を聞くるのゝ口をしきなりとて。摂州箕面山ゝ連行。一の
龍のもとゝ至りて。當山は三ツの龍ゐり。是なるを一の龍とも。底ゝ黒龍住く昔ハ
生く人をとり食ひしるもゐりけり。役優婆塞行者呪縛せんてよ。不生
と話りんハ。唐人の曰く。今もゞなバ見んものを。其役行者と。如何なる人ぞと
問答く役行者とハ。日本大和國葛城上郡。茅原郷と云所ゝ生生し。年三十
二歳ゝ。家を捨葛城金剛山ゝ入。持明仙人となり。法起菩薩の位ゝ至り
又當山ゝ入く。ハ上なる龍の龍穴ゝ入り。龍樹菩薩の説法を聴聞し。真言
秘密の傳授とうけ。當山の頂ゝ行ひ来し。回跡今ゝ存りと云。唐人の曰山と云
龍と云。唐ゝよりハ。童子の戯を遊ゝよりゝん其龍穴のほとゝ行く見ん
道をしへ〳〵ゝとも云。依之是非なく先ゝ進ゝ。これ岩のもとゝ至り。やもくと通り
過りるゝ。唐人の眼ゝハ岩ゝ登ると見へ。まゝ其岩の大ひなるゝ十丈ゝ。のまり

谷易ゝ登んてゝ難し〳〵と。須更佇立を。先ゝ進ゝ〳〵者。早未まとゝへハ劣し〳〵と
進ゝ岩ゝ登んとして顛び落るゝ。三度ゝ及ぶ又登んとをれども。一足し進
ゝ獲ず。倫〳〵心を悔く下山しれるより。唐人戻り岩と云是當山の不思議
却説役行者ハ箕面山を下り。大和國平群郡生駒山ゝ登り玉ふ。般若霊窟と云
ハ。高きゝ雲ゝ聳く嶮岨なり。此窟ゝ入く秘密の呪を持誦し玉ふ。後世ゝ
至りて。勢州安濃郡一色村の僧。宝山和尚（姓山田氏なり）延宝六年十月十日。始く登山し
大伽藍を創建して。大聖無動寺と号。又後ゝ弘法大師の筆跡宝山
寺と書たる額を得く宝山寺と改号。却説役行者ハ。盤若霊窟ゝ居
玉ふ一年ゝ過たり。然るゝ夜毎ゝ来りて。遠きなる石を投げ物をなせ者有
と異し。ひとして身ゝ入るるなし。或時近奇来る者有是を見るゝ其
容貌鬼の如し。ゝ根引の松を持て。三鬼行者の左右より擲てかゝる。行者

錫杖をつげて拂ひ除け戰ひ玉へハ。二鬼ハ麓の方へ逃下り。行者ハ追かけて二鬼ともよ
捕へ玉ふ。此所へ後ふ寺を建立師如來を本尊とし。鬼取山鶴林寺と号也。行者
ハ二鬼を捕へて。汝等ハ何國より來り。如何なる者ぞ。とあるやと問玉へハ。二鬼恐れ入
行者の前ふ頭を下。我々ハ麓の里ふ生れ。幼少して父母ふ離れ。教る者もなく。心の儘
ふ年經ふるまゝ。かゝる力強く。深山幽谷へ入。猛獸を狩とるを樂とも。依之
里人交りをきらひ。鬼なりと云我まゝ鬼の心となり。里を出山ふ入。終ふ魔道
修行成就し。寒暑を厭ハず。大峯葛城紀の國ふハ高野熊野の三の山。何まの
峯ふ登らとも。さゝかさゝるハなし。今ハ多くの眷屬いり。般若窟といへども
我岩屋と思ひしに行者登山し玉ひてより。其窟ふ行るかゝふるとも。依之眷屬
ども。坊をなすと虽し。兎カふ恐れ近寄るかゝふるとも。我又行て誘ん。とや合
登山せしふ。なのゝカ不及神通自在の行者ふまし。ませハ魔道より逆ふる

思ひもよらぬ。壁言ハ猿猴ゞ月蟷螂ゞ斧の如し。依之今より心をいつゝため仕へ
奉ん事を願ひなり。回日の罪を免し玉ハ。多くの眷屬悪鬼天狗の類ひ不
殘仕へ奉んと願ひ入る。其相を見ふ身の長丈餘ふして。左右ふ牙を生じ。怒
怒相なり。行者曰く。修行の坊を。なしたるハ何故ぞや。二鬼答るハ。都て魔道ふ
入者世の乱を喜び大ひなるハ合戰火災ふき家内の乱れ爭ひを樂とも。然ども
神佛の守らせ玉ふ所ふハ其乱れなし。ゑふ正行の人多ル純ハ其教の正しくて
善ふ導き。惡をとなへて。乱れ爭ふなく。樂を換をゑふ正きやうの人をき
らふとゝへども。行者ハ實ふ神仏の如し。依之今より心をいつゝたゞ。行者の眷屬と
なり。善道ふ入ん事を願ふなり。兎し玉ハゞ廣大の。御慈悲なりと。歎きけり。諺ふ
鬼の眼ふ涙と。かゝる事をや云なるべん。行者ハ鬼神の心を和げ善道ふみちびき玉ふ
事。無量の功德なり。後世ふ至ハ。僧尼式ハ乞食などふ。施をさへと純ハ功德

なりと云へ所謂胡椒の丸呑よて。功德の味をまらせ。功とハ力を工よもと。合く。功となる。德とハ。イハ人の行ひなり。ロハかくいつく。直となる。其下ふ心を置なり。合く德となる。さ祀ハ直なる心の行ひをよく功ゐを功德と云なり。譬多くの。金銀朱錢を施し。寺院を建立せるとし。心たゞ〜かちさ祀ハ功德ハなきことのなり。唐土よて。梁武帝七堂伽藍を建立せバ功德何不どと問。達摩大师答く。無功德なりと。武帝又問死てハ何國よ行やと。達摩大师答て。無間地獄よ落るとなり。達摩大师の答へこそ。本意よかなへり。武帝伽藍建立を後よし。前よ功德を問ハ。商人の賣物を。買入る時。前よ筭盤をとるく。損益を考るよ似たり。是のごとき心よて功德ハ。ゐるまじ。正直の行ひをこそ功德と云なり。行者ハ願ひのまゝに。兎一玉よ。是等を眞實の功德と云なり。三鬼ハ行者よ。まるゝ。修驗道よ入る。義覺義玄といへる鬼とへども

皆人なりさ祀ハ強剛の者を鬼と云歟。世よ鬼と称せるこの。繪を見るよ。頭よ三角ゐり虎の革の肌帯を巻たり。是ハ丑寅の方を鬼門と云ふ。身て畫工の作意なるん。又考るよ丑寅を合したる姿なれ。虎の頭よ角を置べきよ。肌帯ハ虎ハ死くも革を殘すと云意なる歟。何分畫工の働き格別なり。此鬼と称るものを。征せると云く。鍾馗といへるものを畫くるなり。是ハ月令廣義よ曰く。鬼を制する呪なりと。在又一説よハ。唐玄宗皇帝開元年間。瘧の病よ臥玉よ。病中の夢よ。小鬼紅き。肌帯をして。ゆよ扇を持て。踊る。玄宗夢心よ是を見て。乐ミ玉よの鬼近奇なて。陽貴妃の。繍香囊と。帝の笛を盗とて。去んとせ。玄宗曰く汝何者なれ。かく盗賊を働くやと問。玉へ。小鬼答て我ハ虚耗と申。人の物を盗。戯とし。人の喜を耗を乐むと云。玄宗大よ怒く。武士を召て。鬼を征せんと。玉よ。此時大いなる。鬼来る。頭よ破れ頭巾をかむり。ゐの深の袍を着し。鈬

を持小鬼を切て是を食ふ。玄宗其名を問給へ吾ハ終南山の進士鐘馗と
云者なり。武徳年中。應舉をくなきを恥て。古郷へ歸らるをおとゝ殿階ふ
觸て死。其時帝吾ふ萠黄の袍を賜ふ尚死骸を葬王。其恩ふ感じて。今
帝の爲ふ虚耗の鬼を拂ふと云時ふ玄宗夢ハ覚てより。依之呉道子と云画
師を召て夢ふ見し姿を画王。呉道子筆を取て是をかくふ。玄宗夢ふ
見王ひしと。皮へも麦ふ所なし。呉道子の曰く。我見し夢と。帝の仰とこし
も麦ざるもへかき易しと云。況ハ玄宗と呉道子と同じ夢を見しなり
是より鐘馗の画たゞしまると云傳ふ又曰く本草ふ鐘馗と八菌の名なり。能
瘟を治すると在り。是等八詰難き所もなれど。鐘馗を咒とする草の名
といへるハさもあるべきなり。鬼といへるものゝなるを弓愚案ずるふ天狗の巣の
高きと。鬼ふ二本の角有とハ爰へがたし。巣の高きもなれハまゝ低きもある

べし。鬼の角も二本もあれハ一本もあり。まゝハ無もあるべし。まづ鬼の説を皇
國の古傳ふよりみゝく考るふ。伊邪那美命。よろづの物を産給。麻奈弟子ふ
八産霊神を産王ふときふ必さがゝの見苦るしかゝらるをおもひそのり
王ひゝく。夜ハ七夜。日ハ七日。吾さがゝを見まなと言王ひゝく。かゝく戸ゞして全ふ
然るふ伊邪那岐命。忍びゝく密ふ見王ひし神ども。伊邪那美命是を考しめし
たゞのしきるふかゞしめゝと。夜見の國へせのんとゝく。黄泉津平坂と言所
まゝく行王ひゝく。思ひ王ひしるハ。八産霊神ハ八を生り王ひ。甚あらき御子や
としやあらとび王ふるのあらとび誰ふ是を考べむ者のあるまじとゝく。まゝか
へり来王ひゝく。八を考べむる神をうみ王ひしる。其産王ひしし神の御名ハ埴安
須毘古神。次ふ埴安須毘賣神。是八土を生り王ふ神なり。次ふ産王ふ神ハ
彌都波能賣神。是八水を生り王ふ神なり。次ふ川菜麓を産王ひゝく。若久の

神のいらびなば水の神瓮をもち土の神川菜とちて鎮むべしと教へ給ひて夜見國へ行給ふ。水と土とをこねて父を防ぎ瓮をひゞせとゝふは此いらん なり。まゝ川菜とへるものは形席なども唐草のかゝまとゝふは川菜 なて父防の為に用ゐるなり。却説伊邪那岐命は別離をなげき給ひて夜見の國へ追ひ行給ふ。夜見の國とは女神の曰ひしは今一度かへり来給へ妹と もに作りし國なんぞ一ッ處に君ゝとのをとゝのりしんは女神是をきゝ給ひて今妹 一人かへり早く来給へ直にかへらんものを今は夜見の國の穢れたるを食し たんはかりがゝしい。吾名は伏命の来給ひしゝるを思へ夜見津神に論 んぞばらく待給へと戸ざして金ぞ伊邪那岐命待かゝ給ひて一ッ父をとゝしく見給 ゝ長見ぐるゝき姿なり見畏ゝて逃還り給へば伊邪那美命約束の違ひ ゝを深く怒らせ給へば雷の神なるのけしふ伊邪那岐命夜見津平坂と云て

桃の實三ッとりて拋うち給へば雷神畏れ逃かへりゝなり父産霊神の命子み伊加豆智神のれども雷神とは異なり
まゝ云桃を魔よけふなると云此古傳ふよりと云なり別傳ふ曰く其とき
實のいりしは東さゝたる一の枝なりと云依之東ふさしたる一の枝のいらびとり置て
魔よけに用ゐべきなり國風を好む人は尋得て所持とるも多かりしか狩
逆来る雷神の類ひを鬼と云故神と云は尊きものなれども吏
は神と人との關目をとゝきまへぬもなり。鸕鷀草葺不合尊までを神の代と云
神日本盤余彦尊神武天皇と申奉より人の代と定れり。神代と人の代とは大こゝく
異なるものなれど是は依き訣の事は爰ふのらはさぞまつ豫を云人も神も都
の名にて高位の貴人もいれば人食をとる者も人なり。天津神國津神たゝ
ふとき神々のまゝはせはまゝ疫神もいり。猟人の嫌ふ貧乏神もいり。尊きを
のりふのくぞされば雷の神などはやゝきの神なるべし其雷神の桃ふ恐れ

役行者鳴川山に登
菩薩の出現を拜し

ふたぬさ考ふ。唐土ハ相似たる説あり。桃を五木の最上とも。五木とハ桃・柳・棗・楮・槐なり。桃をとりて鬼を制するゆへなり。一説ハ東海の中ハ度索山とて山あり其山ハ三千里蔓たる桃あり。其東北ハ門有悪鬼出入するゆへハ鬼門と号も。桃をもて制する也。不未神荼鬱累と云者。桃の木の弓ハ矢ハ射て鬼を虎ハ食をとと云へり。是等ハいやしきなれども。桃をもつて制する所ハ伊邪那岐命の古傳ハ相かなへり。然ハ雷の神を鬼と云歟。何れ夜見より出て来て災をなすものと見へたり。雷を画ぐくハ鬼の太鼓と持たるをかくハ太鼓ハ鬼を追ふゆへ。牟斛と鬼のもぐくハ雷の神を鬼なりと思ひて画ぐくなり。雷の神を鬼と定て云ハ有と云ハ虫も姿を不見。眼ハ見ざれハ無ぐ如しと。ぐがゐもいらん姿有て眼ハ見ざるハ顕事と幽事との差別有故なり。顕れ事と幽事とハ。別ハ本この豊葦原の中津国ハ大国主之神の志ろしめす召国なれとも。天照大御神の御孫の神。天降り玉ふなれ。武甕槌神天降りて其ハ大国主之神ハ傳へ玉ハ。大国主之神答ふ。武甕槌神天降りて其ハ大国主之神ハ傳へ玉ハ。大国主之神答ふ。命詞ハ天津神の命。慇懃如此也。何将奉違干御言。吾所治顕事ハ天津神之命子可治也。吾者隠而将治幽事焉。報命白。兵仗ハ是のごとくハ曰ハ武甕槌神ハ天津国ハ遂り玉ふ。天照大御神ハかくと告玉ふ。天津日高彦穂瓊々杵尊天降玉ふ。顕事を志ろしめ召玉ふ。それより以来御代萬々歳皇御孫の命の志ろしめ召尊き御国ハなのむ。大国主神ハ出雲国小築杵の宮を建て隠れ居て幽事を志ろしめ玉ふ。国の主ハ大国主の神の築杵の宮ハ入玉ふ。ことゆへ諸国の神々集り玉ふ。頃ハ十月ハ諸国の神皆出雲国ハ集り玉ふ。ゆへなり。此故ハ後世まぐも十月ハ。諸国の神皆出雲国ハ集り玉ふ。また云十月を神無月と云。大国主神隠れ玉ひ天津神の御孫の神天降り

玉まくを國の主たる神のなかき也へ神無月と云ふなん天照大御神の御孫の天降り給ひて新に顯事を志るし召ハ十一月より陽氣はきてまゝ陽氣を生じよりと頃なれハ陽來復と云なり大國主の神ハ隱れ玉ひ天津神の天降り給ハぬきてたゝまるなり陽來復の時よりハ神慮よりて凡慮の及ぶところにあらず如是顯事と幽事と差別あり顯事に屬もの人をたゝめとゝく皆天子の御惠を蒙ざるハなし幽事に屬るの人死したる魂或ハ禽獸の類なり此故に鳶烏をたゝ之猪鹿猿一切の禽獸死骸を顯さず是幽事に屬の證據なり牛馬犬猫其外鳥など死く骸をのこさずハ家に飼れて顯事に屬もの也へなり幽事に屬るの顯事より ハ見へぬなり死せるとゝ云事ハ顯事をたなれて幽事に入る事なり人も死したる魂ハ幽事に屬也へ見へぬなり譬ハ一間に燭火を置一間に燭火を不置明き方より暗き方ハ見へず暗き方より明き方ハよく見へるなり顯事と幽事と ハ如是差別あり是ハ予が考へるなり平田大人の著されし靈能真柱の說に委しく詞ををしなり鬼といふものハ幽冥のものにして姿ハ目に見へぬなり役行者ハ幽冥に屬鬼神をもよく駈使し玉ハ通力自在の神仙なり凡俗の及所にあらず尊むべし鬼の事ハかくの如くなれとも是のごとしまゝ女を鬼といふ事あり伊勢物語に女のわかく群来りを鬼のもがさなりといふ此例をひきて女を鬼とよみし哥あり村上天皇（六十二代）の帝の命宇康保四年源重之陸奥守に任せられ奥州名取郡黒塚に在く病死せられ女たりし殘りしに平兼盛の送られし哥に

陸奥ハのぐちの黒塚に鬼こもれりと云らまくもかなとよみしもあり又云女を鬼と云ハ佛經より出たる歟華嚴經に女人地獄之使能斷佛種子外面似菩薩內心如夜叉と法華經に才二十六陀羅尼品に鬼子母並に十羅刹

女の名をいふ〻ゝしたり。一名藍婆。二名毗藍婆。三名齒齒。四名華齒。五名黑齒
六名多髮。七名無厭足。八名持瓔珞。九名皐諦。十名奪集といひ。面ハ美王の如くゝ
しく。一切衆生の精氣を吸ふを好む。鬼女よて鬼子母の女なり。名のいつくしたた
ゝ。十人なれども。外ゝ子なよの子なり。其子を愛せるゝ。限りなし。志ろゝ他人の
子を取食ふを好ゝ。其取食ふ〻ゝく千人と云數をもつゝて。釋尊是を悪ゝ玉ひ
鬼子母の子をとりて隠ゝ玉ハ。位さけびく尋ゝる山もくだくゝ如くゝ。釋尊
戒ゝ曰ひ給ハ。女多の子なれども。一子をしなん。如是位さけびく尋ゝ。其心を
いゝく。人の子を取食ふ事を止よ。子をとられゝ親の心をさつせよ。女多くの子なれ
ども。是のごとくなげく。唯一人の子をとられゝ。親の心ハいろむさのとおもふぞやと
いひ給ハ。鬼子母ハ恐れゝく。今日より後。人の子を取食ふまじ。何とぞ我子の
在所をおしへ玉へと。願ひ給ハ。釋尊曰く。今日より人の子ハ取食ふまじ。まゝ悪心

をひるがへゝ。我教ゝ隨ハ女ゝ子を出さんといひ給ハ。鬼子母誓を立く。仏法を
護持せんと願ふ依之釋尊子を出ゝ玉ふとの。此時誓をたつ。其詞曰く
悩乱説法者頭破作七分如阿梨樹枝是より後。悪をなさじ。人の子を取
食ふるなく。却く願ひをかなへ。鬼子母神と。諸人の敬ひとうくるなり是のごと
く。多くの子なれども。法華經ゝ夫の名を唱ぶ又數千の子のうちゝ男子の名
を聞ば。母も女も男まさりのくのいろふ。男まさりの女を。鬼と云ふ。是等ハ遠
き天竺のゆゑなれハ。經文よりく知と雖ども。志のれども日本ゝも
相似たるものなり。貪賤ゝ。子ハ半々ゝ生。貪瞋智の三柏子を揃へ男を蔑ゝ
ゝ。常ゝ男ゝまさる細帶をゝ。一子ハ脊負。一子ハ抱きく懐ゝ入。乳房ハ布袋
和尚の宝袋ゝ相似たり。髪ハ乱れ面ハ黑く。齒ハ白く。鼻と眼ハ小さく。口と尻とハ
甚大ゝ。子を愛せるゝ鬼子母のごとゝ。まく豚魚ゝ似たり。何豚ハ俗ゝ。ぶぐ

と云。河豚と云魚ハ子を深く愛し。子をとらる時ハ親まゝ其所ヨ来りて
とらゝゝとゝべり。實情の深き魚なり。故ヨ易ヨ中孚豚魚吉。利涉大川。利
貞し貞。實情の深きを云なり。かの女なゞハ。礼を考ゝ。義ヨ晋く唯我子を
のゝ愛し。他人の子を悪ゝ。小児の爭ひを聞ゝ自出く子ヨ代く爭ヨ中孚の
卦ヨ豚魚の實情の深きをゝゝべゝ。其實意の通ずる所を似て面躰なり
ハ豚魚ヨ似たり常ヨ世評を尿といゝべゝ。忠臣孝子のたなゝハ嫌ひ。唯好む。密夫
の喧嘩。悪ハ貪家のいらそひ。まゝなる時ハ小便の交そのをいらそヨ。是等のゝゞ
ひ。高位の貴人見玉ゞ。鬼とやおもひまちん。恥やきるヨかんなりるかゝるたゞお
ハ邉鄙ヨもまれヨハなりと聞及べり。却説女を鬼と云ヨ有ゝ。鬼のをゞゝを考
るヨ。角有ゝ皮の肌帯ハ前ヨ著ゝたるなり。今指を三本ヨ画くるをゝゝ
ヨ。光神像仏像を見るヨ。指ハ五本なり。人ゝまゝ五本なり。是ハ木父土金水の

五行を本とし。仁義禮智信之五常まゝ君臣父子夫婦長幼明友之五
倫何れヨも相叶へり。如是五常五倫を守ハ指五本なり。よりゝ鬼ハ魔鬼の者
として。貪欲愚智瞋恚の三毒ヨかゝゝどりて三本ゝとし。いろなる三本指の鬼と
いへども。其三毒の心を所ゝ。佛前ヨ向ひ。合掌なる時ハ左右合ゝゝ。南無阿彌
陀佛の六字の数ヨ叶ふと云意なり。女貴人の前ヨ出く三指をたくとゝて人
女三毒の入物なりと佛の戒もなれハ。三ツ指を畫くと云意なり。鬼ハ陰のものなり
故ヨ。鬼の住家を考ゝヨ。伊邪那岐命を。追来ゝ。雷の神といへるものも。夜見の
國ヨ来ゝ。其夜見の國ハ何れヨ有と云ハ。古傳ヨよりゝ。是を考ゝヨ大虚空
の中一物生而其狀難言浮雲之根係處なきゞ如ゝと有。其一ツの物より
清上り物天となり。濁下り物ハ夜見となり。さんハ夜見ハ地の下
ヨ。其地の下なり。夜見の國ヨ雷神と云。鬼とさゝをべき神なり。是ハ白国の古

傳よりいづく考ふなり又佛道よりいづく考ふる往生要集曰閻浮提の下一千由旬に等活地獄あり。立横一万由旬せとあり。是より次々に地獄あり。其間の遠きこと八前に須ゐなり。等活を始とし。次に黒縄衆合。嗥唼大喚。燒焦熱大焦熱。阿鼻是を八大地獄と云。大地獄に八十の別所あり合一百三十六地獄なり。まづ等活地獄へ遠きこと。一千由旬とあり。是に須ゐたれば。阿鼻地獄まぐ八なり。八十万里となるそれより次々遠きこと。是遠きこと八なり。其地獄に罪人を責むることを鬼なりと云又画もまるなり。何れの道にふも。低き音き方より来る陰物なり。其陰なる鬼に太鼓をとゝせ高きにあげて雷のとゞろくと云ハもこゝ都合なる。大鼓ハ馬の皮をとゝろく張せ陽の音を發せ。牛馬ハ陰陽なり。牛ハ陰なるによりて頭を上らとき分なゝ又云牛ハ陰なり。其牛の血又陰なり。鐘ハ陰なるもの牛の無をぬ

ときハ。ひく陰声を發とゝろとく。唐土にハかゝる例もまゝあるゆゑ。經書にもみへたり馬ハ陽獸なるゆへ頭を上る時分なり。牛馬ハ表裏の相違なるゆゑ牛死方馬ハ南方にあたるなり。大鼓ハ陽鐘ハ陰なり。此故に戰場に用る時ハ太鼓をうゝく進む。鐘をなゝしく退く。鬼も鐘も陰なり。の大津繪の鬼の念佛など相應のをゝくなり。志るに陽声を發る。大鼓を陰なる鬼にとゝくせ。高きに登らせ。陰陽のゆゝしをひとてなりと云も可なり。夜見の國より来る。雷の神も。父産霊の神の御子。伊加豆智之神も同神とゝるゆ。遠ゝうゝしと。夏の頃虚空にて鳴ハ父産霊之神の御子伊加豆智神の御仕業なり。夜見國より来る雷神ハ甚拙き神にて鳴雷の神と八別神なり是に身く雷鳴のゝまゝ。あつゝゆ皆人のこゝろの處なれども。爰に長々しく。雷神の說を演ハ本をしなゝ枝葉をうるゆへ鬼の話に却く說かの鬼と称ま。義覺義玄も。今ハ行者の呪力に伏し

懈怠なく仕へる。行者八常に嶮岨の地を踏分んとの願ひ果さんと義覺
義玄導き奉りて鳴川山に登る。行者八山の絶頂に在て眞言の密法を誦し
玉ふ。千日丈り。爾時岩間より光明赫々として千手觀世音菩薩出現し給ふ行者
歡喜怡悅し。即尊像をきざみ安置し千光寺と号せ。是より當山に行場を
開き。西の塩き東の塩き蟻のとてる。びよふぶ岩。何まも峨々として畏しきる限なし
然れども。行者の御心に叶ひ金峯山ようたる大峯山上ヶ嶽を開き果ぬ當山と鳴川
山千光寺元山上と号せ日本眞言宗の祖八弘法大師なり。頃八延暦年中顯密二教の
宗門を建立し給ふ然に行者眞言法を行ひ果ぬ。かしく思られど是八箕の西山の龍
穴に入て龍樹菩薩の淨土に至り。さづのり果なり。うるごのくべき事ハ。金峯山
を開き山上ヶ嶽を踏分。行場を開き玉ふ事ハ。次の巻にあらはしぬ

役行者御傳記圖會巻之中終

蘆川

村田所持